
利府町
子どもの生活に関する実態調査結果報告書

〔概要版〕

—目次—

1	調査概要	1
	(1) 調査の目的	1
	(2) 調査の実施状況	1
	(3) 報告書の見方	1
	(4) 貧困線の設定について	2
2	調査結果	2
	(1) 本町における貧困線の判定結果	2
	(2) 世帯の年間の手取り収入	3
	(3) 世帯の年間収入の充足感	4
	(4) 暮らしのゆとり	4
	(5) 経済的に困った経験	5
	(6) 父母の就労状況	6
	(7) 就労に関して困っていること	7
	(8) 父母の最終学歴	8
	(9) 子どもの食事の摂取状況	10
	(10) 子どもの孤食の状況	12
	(11) 子どもの成績	13
	(12) 経済的理由による進学・就学の断念	13
	(13) 子どものことで悩んでいること	14
	(14) 今後、子どものために必要な支援	15
	(15) 保護者の相談相手の有無	16
	(16) 無料の学習支援制度の利用意向	17
	(17) 「子ども食堂」の利用意向	17

平成30年3月

利府町

1 調査概要

(1) 調査の目的

平成 26 年 1 月に「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が施行され、平成 28 年 3 月には「宮城県子どもの貧困対策計画」が策定されたことを踏まえ、利府町における子どもの生活の実態の把握と、課題を整理するために調査を行いました。

(2) 調査の実施状況

① 調査期間

平成 29 年 6 月 29 日～7 月 31 日

② 調査方法

郵送による配布・回収

③ 調査対象・配付・回収状況

調査対象	配布数	回収票	回収率
0～18 歳未満の児童がいる世帯 (保護者及び小学 5 年生以上の児童)	2,000 票	877 票	43.9%

※調査対象者については、平成 29 年 4 月 1 日時点の本町住民基本台帳より無作為抽出しております。

(3) 報告書の見方

- ① 図表の中の n は回答者の総数を意味しています。設問によっては、回答者が制限される（別の設問である選択肢を選んだ回答者のみ回答する場合など）ため、n の数は一定ではありません。
- ② 比率は、n を 100% とした百分比で算出し、小数点以下第 2 位を四捨五入しています。そのため、表示されている百分比の合計が 100% にならない場合があります。
- ③ 複数回答が可能な設問では、その比率の合計が 100% を上回ることがあります。
- ④ いくつかの選択肢を合わせて合計した値を記述する場合、小数点以下の数字をもったデータを合算して小数点以下第 2 位を四捨五入して記載しているため、表示されている内訳の値と合算した値とが一致しない場合があります。（たとえば、9 人が 3 つの選択肢に 3 人ずつ回答した場合、一つの選択肢の割合は 33.3% となりますが、この 3 つの選択肢を合算した値は見た目では 99.9% ですが、合算した値に関する記載は 100.0% としています。）
- ⑤ グラフ内で、1% 未満の数字については、グラフの見やすさを考慮して表示を割愛している場合があります。
- ⑥ 設問に対するコメントは「全体」に対するコメントとし、内容に応じて「貧困線判定別」「ひとり親世帯」について記載しています。

(4) 貧困線の設定について

本調査では、世帯全員の1年間（平成28年1月1日～12月31日の期間）の手取り収入の総額（可処分所得）について、世帯人員数別の所得区分（6段階）で回答いただき、それを基に“貧困線未満”と“貧困線以上”に区分し分析を行っております。

貧困線“未満”と“以上”の区分については、国で実施されている「国民生活基礎調査」の基準を基に、本町の貧困線を設定し、分類1と分類2に該当する回答者を、“貧困線未満”としています。

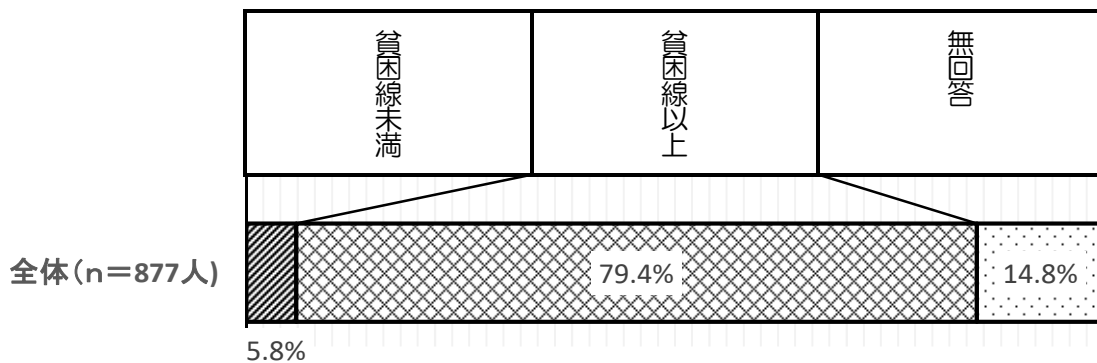
※国ではあらかじめ調査員が配布した調査票に世帯員が自ら記入し、後日、調査員が回収する方法により調査を行っており、郵送配付・回収による本町の調査とは可処分所得の把握方法が異なります。

世帯人員数	分類1	分類2	分類3	分類4	分類5	分類6	国の貧困線
2人世帯	85万円未満	～175万円未満	～260万円未満	～345万円未満	～430万円未満	430万円以上	173万円
3人世帯	105万円未満	～210万円未満	～315万円未満	～420万円未満	～525万円未満	525万円以上	211万円
4人世帯	120万円未満	～245万円未満	～365万円未満	～485万円未満	～605万円未満	605万円以上	244万円
5人世帯	135万円未満	～275万円未満	～410万円未満	～545万円未満	～680万円未満	680万円以上	273万円
6人世帯	150万円未満	～300万円未満	～450万円未満	～600万円未満	～750万円未満	750万円以上	299万円
7人世帯	160万円未満	～325万円未満	～485万円未満	～645万円未満	～805万円未満	805万円以上	323万円
8人世帯	175万円未満	～345万円未満	～520万円未満	～695万円未満	～870万円未満	870万円以上	345万円
9人以上世帯	185万円未満	～365万円未満	～550万円未満	～735万円未満	～920万円未満	920万円以上	366万円

“貧困線未満”と判定

2 調査結果

(1) 本町における貧困線の判定結果



今回の調査では、“貧困線未満”は5.8%となっている。

※参考：平成27年の「国民生活基礎調査」による、子どもの貧困率は13.9%となっています。

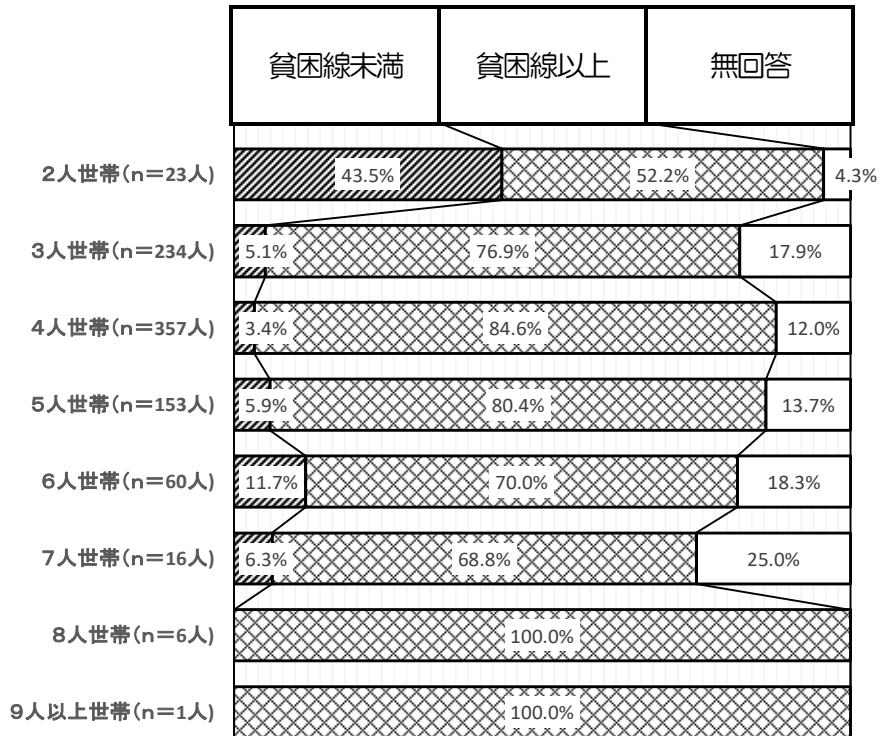
※国とは、調査方法等が異なることから、国における子どもの貧困率とは単純に比較することはできません。

【用語の解説】

○子どもの貧困率：子ども（17歳以下の者）全体に占める、等価可処分所得が貧困線未満に属する子どもの割合

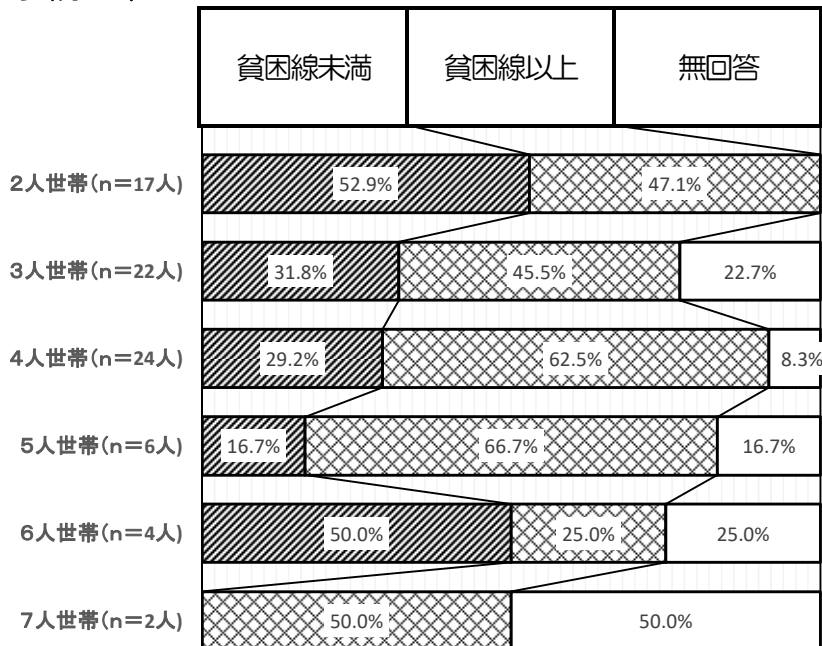
(2) 世帯の年間の手取り収入

①全体



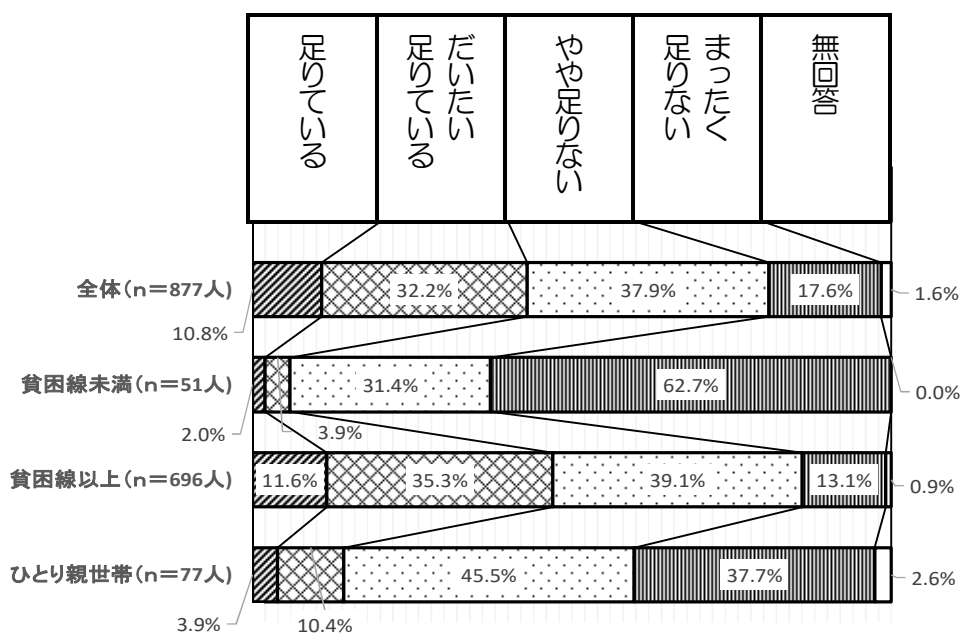
「2人世帯」では、「貧困線未満」が43.5%と4割以上を占め、他の世帯区分よりも「貧困線未満」の占める割合が高くなっている。

②ひとり親世帯



ひとり親世帯では、「2人世帯」で「貧困線未満」が52.9%と半数を超え、3～5人世帯までは世帯人数の上昇とともに、「貧困線未満」の割合は減少しているが、「6人世帯」では5割が「貧困線未満」となっている。

(3) 世帯の年間収入の充足感

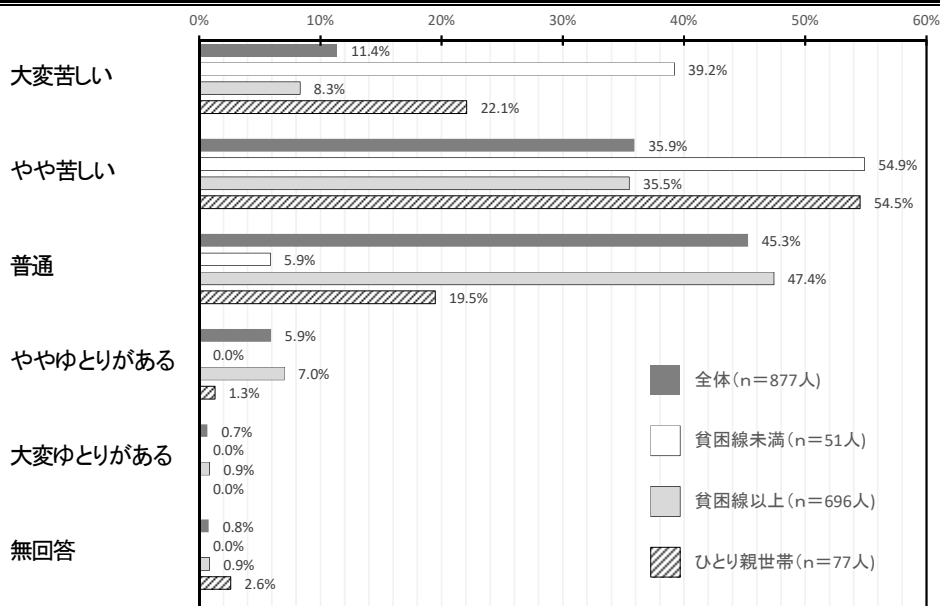


世帯の年間収入の充足感は、「やや足りない」が 37.9%、「まったく足りない」が 17.6%で、合わせると半数以上が足りないと感じている。

貧困線の判定別にみると、“貧困線以上”では「まったく足りない」が 13.1%であるのに対して、“貧困線未満”では 62.7%となっている。

“ひとり親世帯”でも 37.7%が「まったく足りない」としている。

(4) 暮らしのゆとり

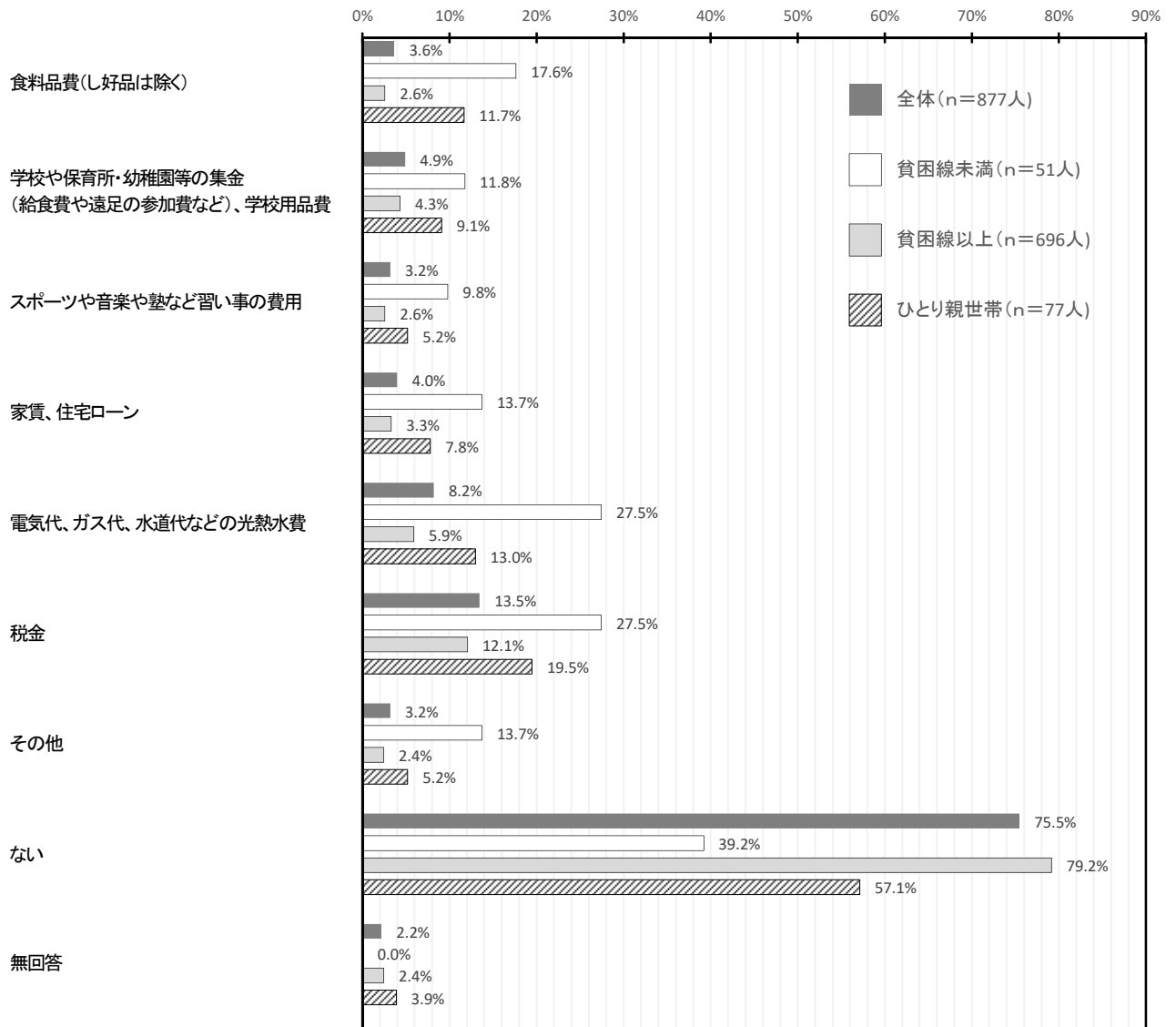


現在の暮らし向きについては、「普通」が 45.3%となっている。一方、「やや苦しい」(35.9%)、「大変苦しい」(11.4%)を合わせて約5割が苦しいとなっている。

“貧困線未満”では、「大変苦しい」(39.2%)、「やや苦しい」(54.9%)を合わせると9割以上が暮らし向きは苦しいとなっている。

“ひとり親世帯”では「大変苦しい」(22.1%)と「やや苦しい」(54.5%)を合わせると7割以上が暮らし向きは苦しいとなっている。

(5) 経済的に困った経験



経済的に困った経験については、約8割が「ない」と回答している。

困ったこととしては「税金」が13.5%と最も多く、次いで「電気代、ガス代、水道代などの光熱水費」が8.2%となっている。

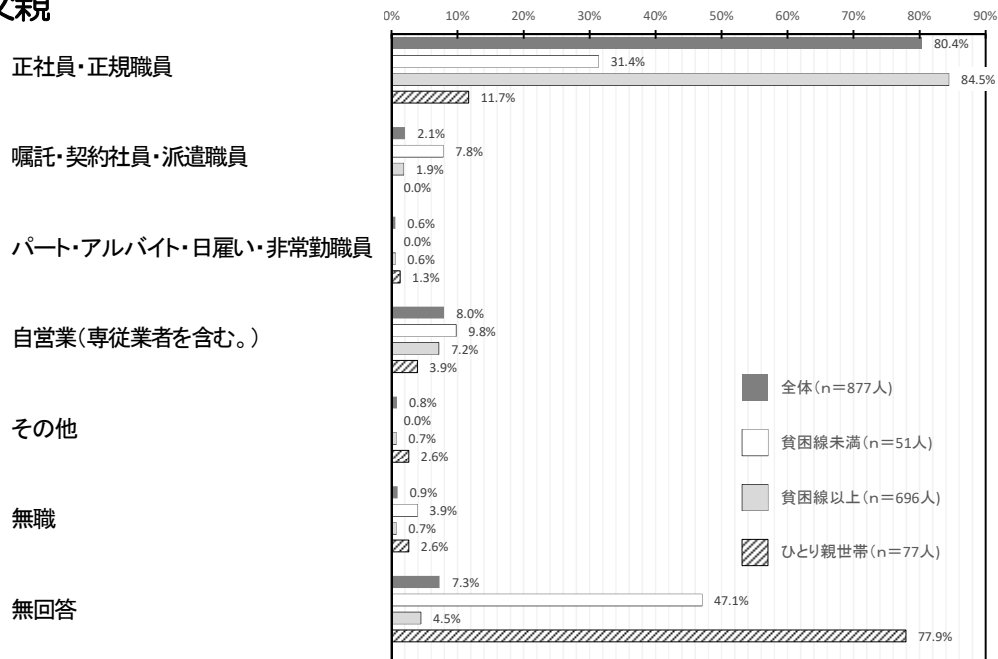
貧困線の判定別にみると、“貧困線未満”では「ない」という回答は39.2%にとどまり、全般的に困ったという回答の割合が“貧困線以上”よりも高くなっている。

また、“貧困線未満”では、「電気代、ガス代、水道代などの光熱水費」(27.5%)、「税金」(27.5%)についてはともに約3割となっている。

“ひとり親世帯”では「税金」が19.5%と全体よりも割合がやや高くなっている。

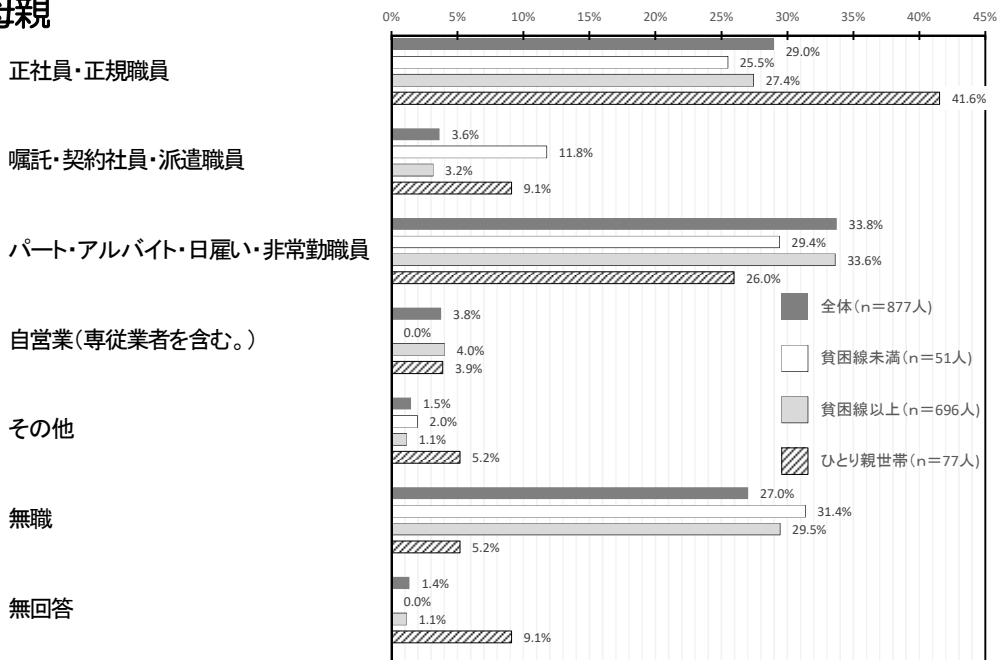
(6) 父母の就労状況

①父親



父親の就業形態は、「正社員・正規職員」が80.4%となっている。一方、“貧困線未満”では31.4%、“ひとり親世帯”では11.7%と低くなっている。

②母親

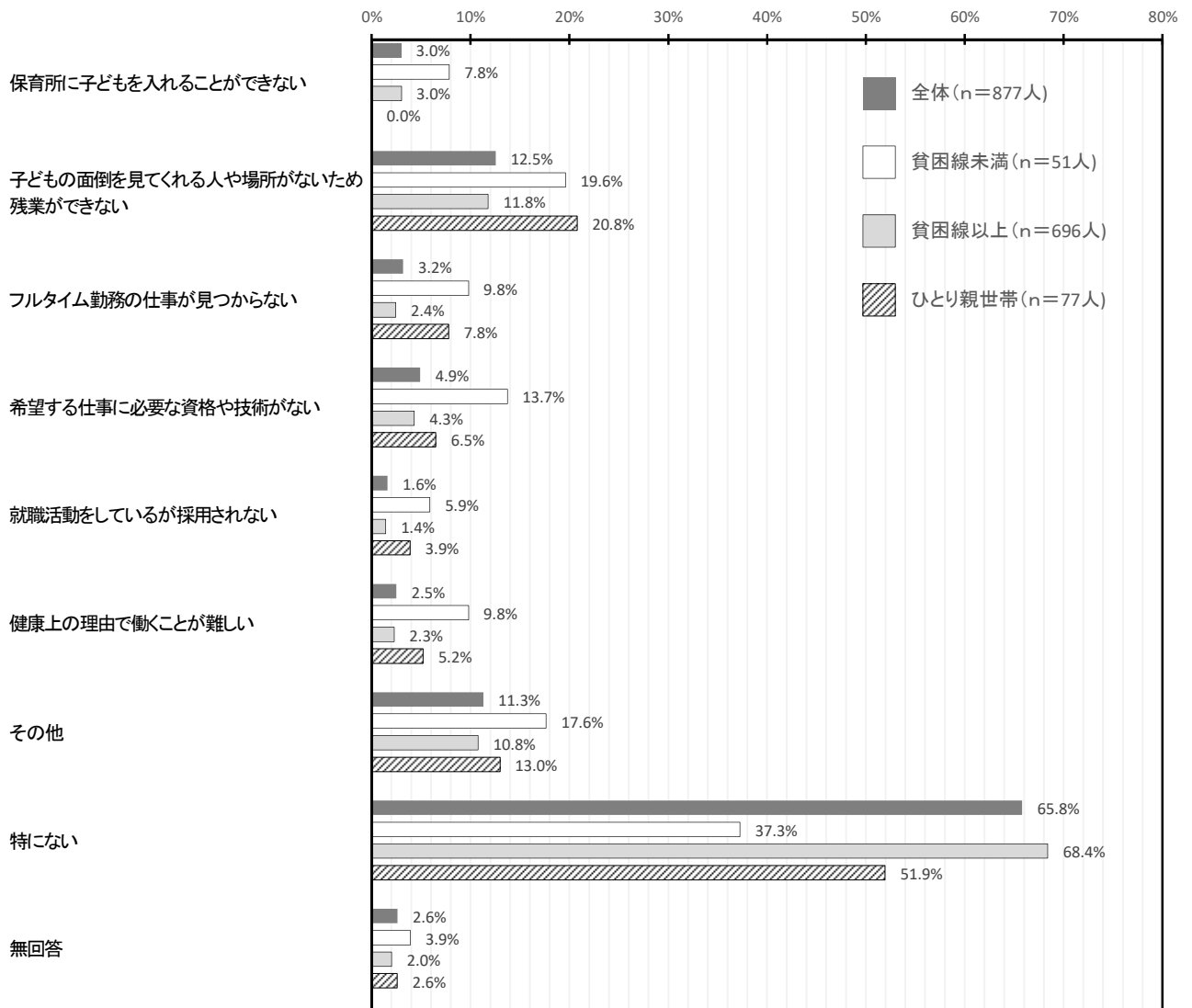


母親の就業形態は、「パート・アルバイト・日雇い・非常勤職員」が33.8%、「正社員・正規職員」が29.0%と、正社員等よりも、パート等の割合の方がやや高くなっている。

貧困線の判定別にみると、母親の就業形態に大きな差はないが、“貧困線未満”では「嘱託・契約社員・派遣職員」の回答の割合が11.8%と、やや高くなっている。

“ひとり親世帯”では「正社員・正規職員」が41.6%と高くなっている。

(7) 就労に関して困っていること



就労に関して困っていることは、「特にない」が 65.8%となっている。

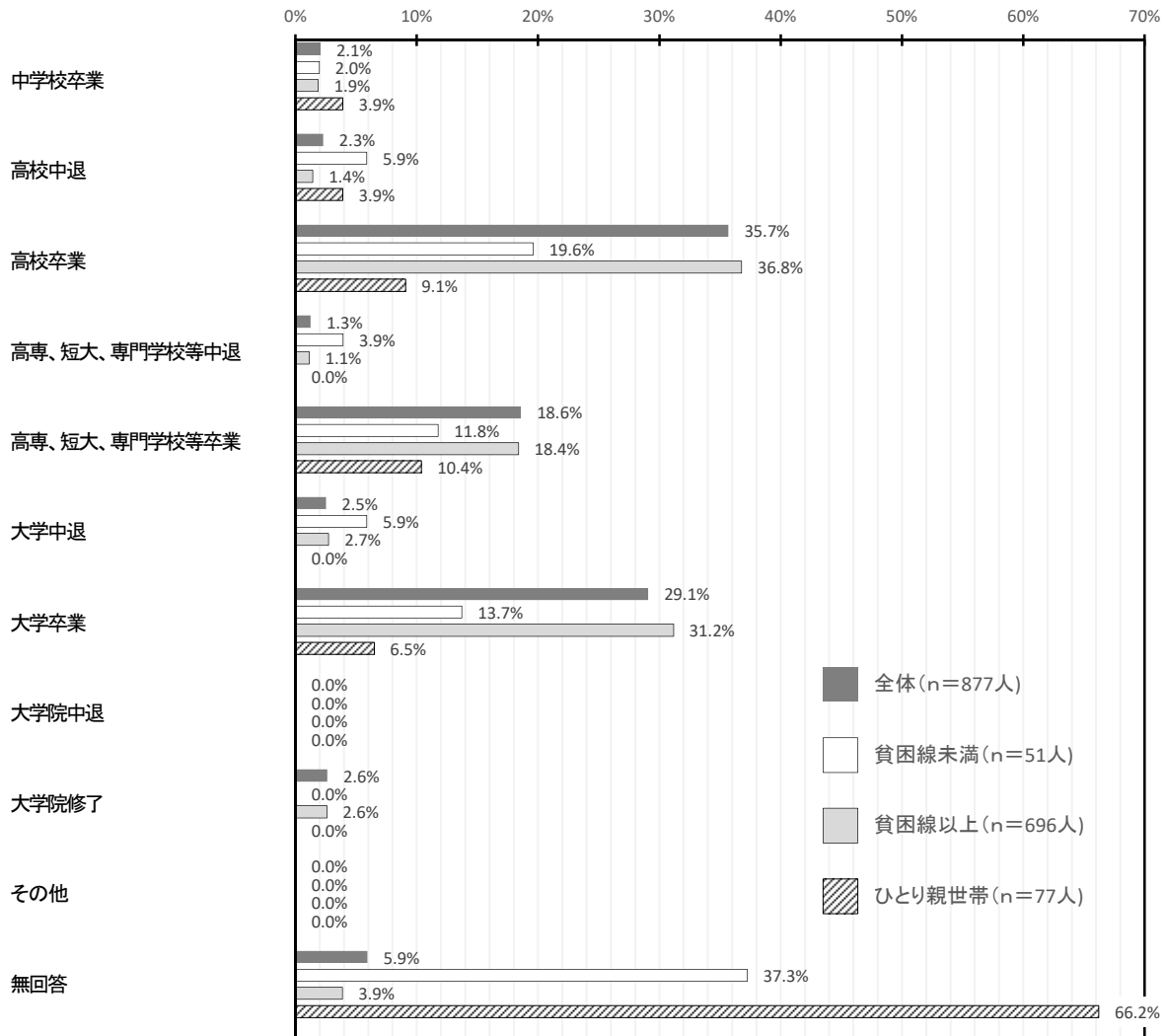
困っていることとしては、「子どもの面倒を見てくれる人や場所がないため残業ができない」が 12.5%で1割を超えている。

貧困線の判定別にみると、「特にない」という回答は、“貧困線未満”では 37.3%と“貧困線以上”の 68.4%よりも回答の割合が低くなっている。困っていることへの回答は全般的に“貧困線以上”よりも“貧困線未満”の方が割合がやや高くなっている。

“ひとり親世帯”では「子どもの面倒を見てくれる人や場所がないため残業ができない」が 20.8%となっている。

(8) 父母の最終学歴

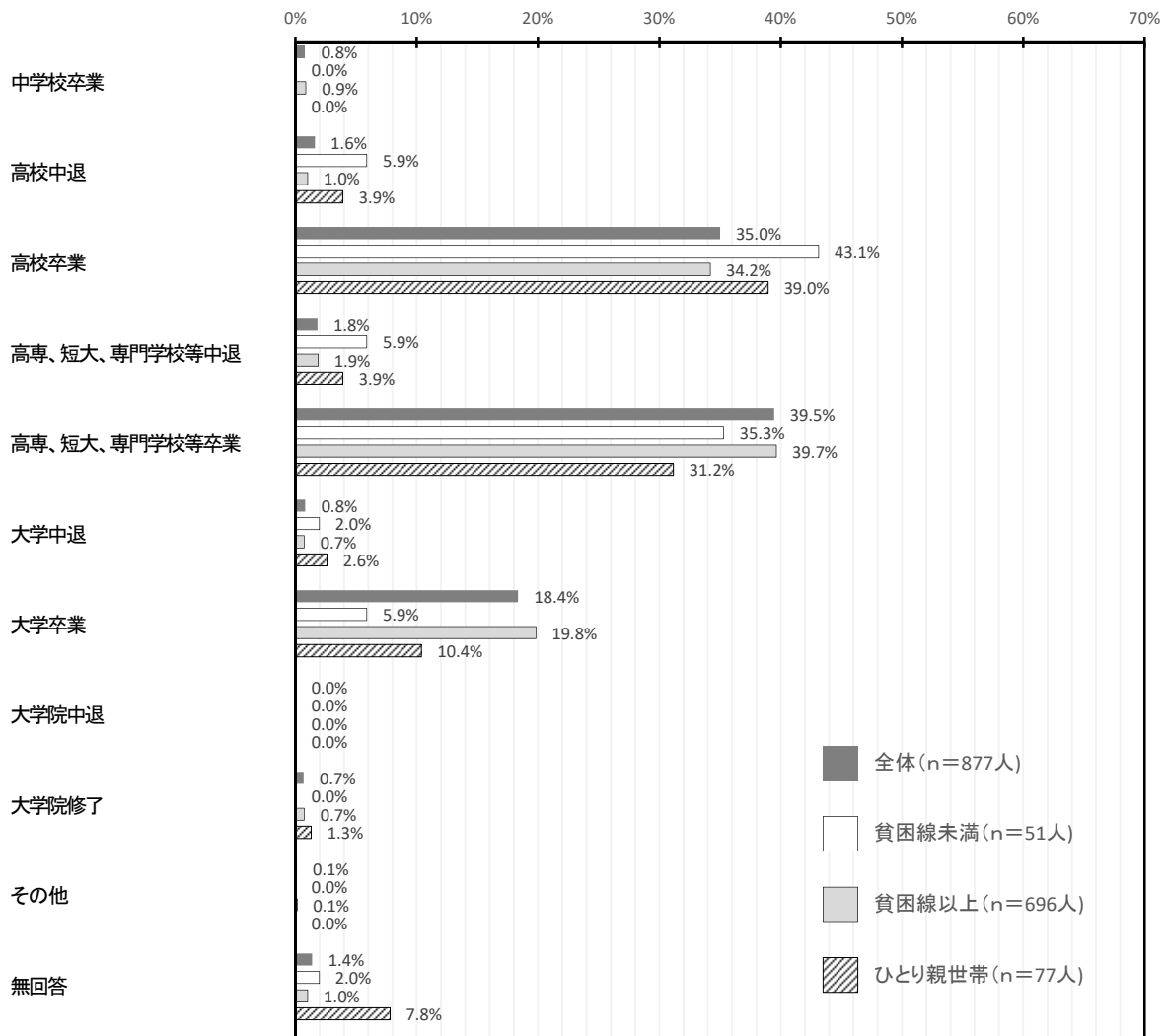
①父親



父親の最終学歴は、「高校卒業」が35.7%と最も多く、次いで「大学卒業」が29.1%、「高専、短大、専門学校等卒業」が18.6%となっている。

貧困線の判定別にみると、「貧困線未満」では「高校卒業」「高専、短大、専門学校等卒業」「大学卒業」のいずれにおいても、「貧困線以上」よりも割合が低くなっている。

②母親



母親の最終学歴は、「高専、短大、専門学校等卒業」が 39.5%と最も多く、次いで「高校卒業」が 35.0%となっている。

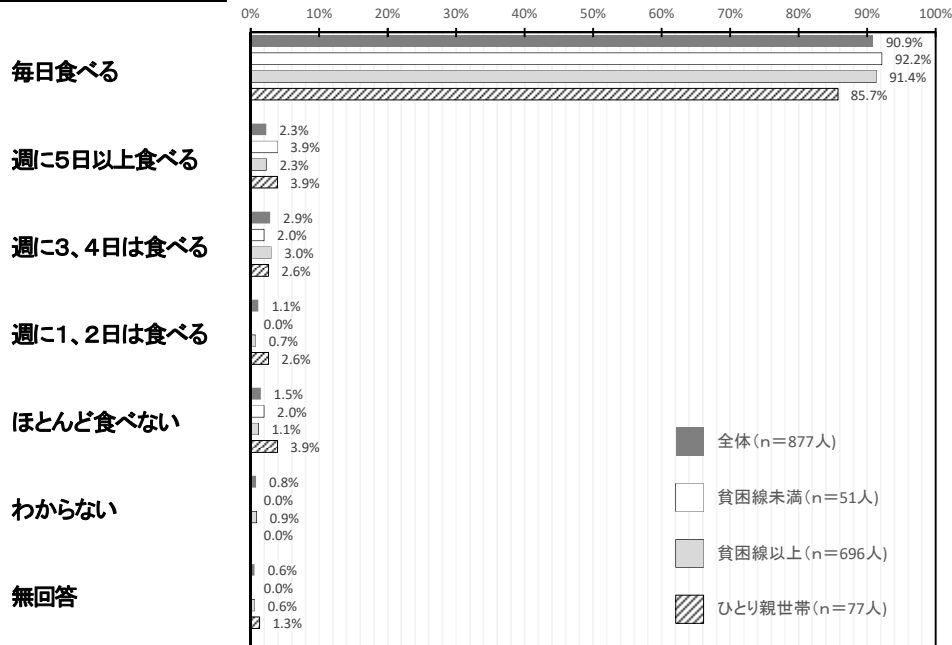
貧困線の判定別にみると、「大学卒業」は“貧困線以上”が 19.8%であるのに対して、“貧困線未満”では 5.9%と割合が低くなっている。反対に“貧困線未満”では「高校卒業」が 43.1%とやや割合が高くなっている。

“ひとり親世帯”でも「高校卒業」が 39.0%と全体よりも回答の割合が高くなっている。

(9) 子どもの食事の摂取状況

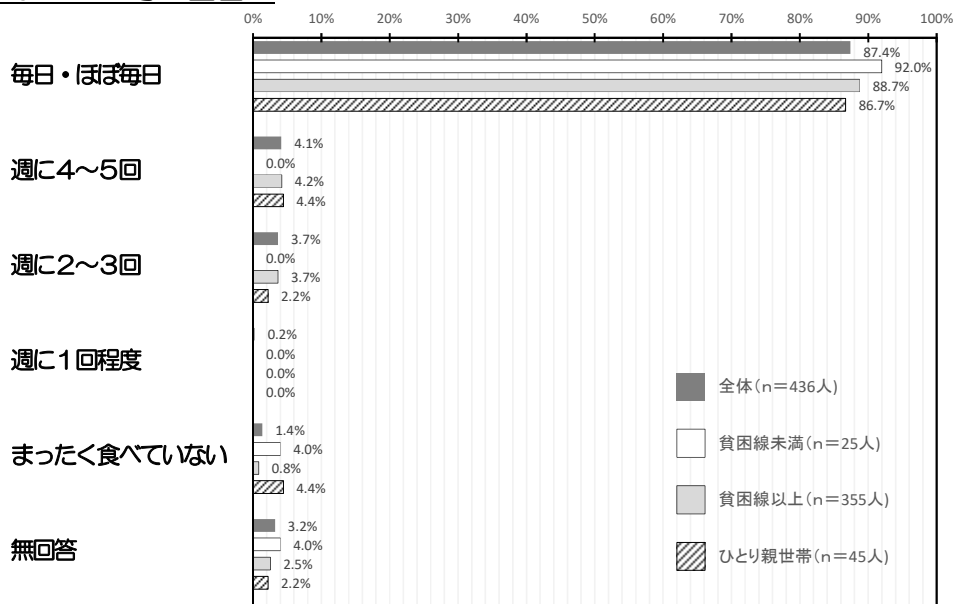
1) 朝食摂取状況

<保護者の回答>



子どもの朝食の摂取状況は、「毎日食べる」が90.9%と大半を占めている。貧困線の判定別、ひとり親世帯でも朝食の摂取状況に大きな差はみられない。

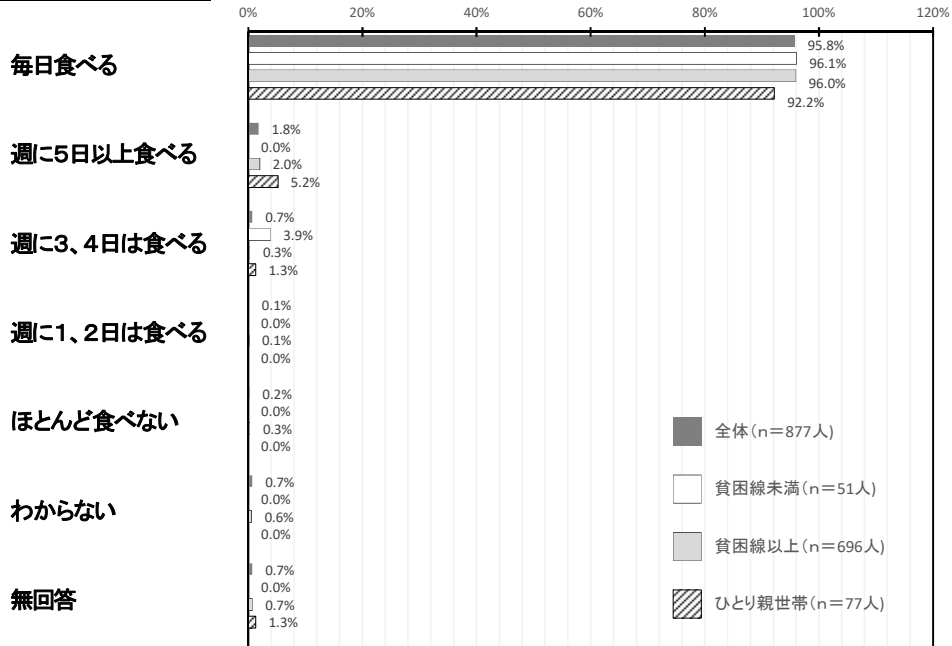
<子ども自身の回答>



朝食の摂取状況は、「毎日・ほぼ毎日」が87.4%となっている。一方「まったく食べていない」は1.4%となっている。貧困線の判定別にみても、朝食の摂取状況に大きな差はみられない。

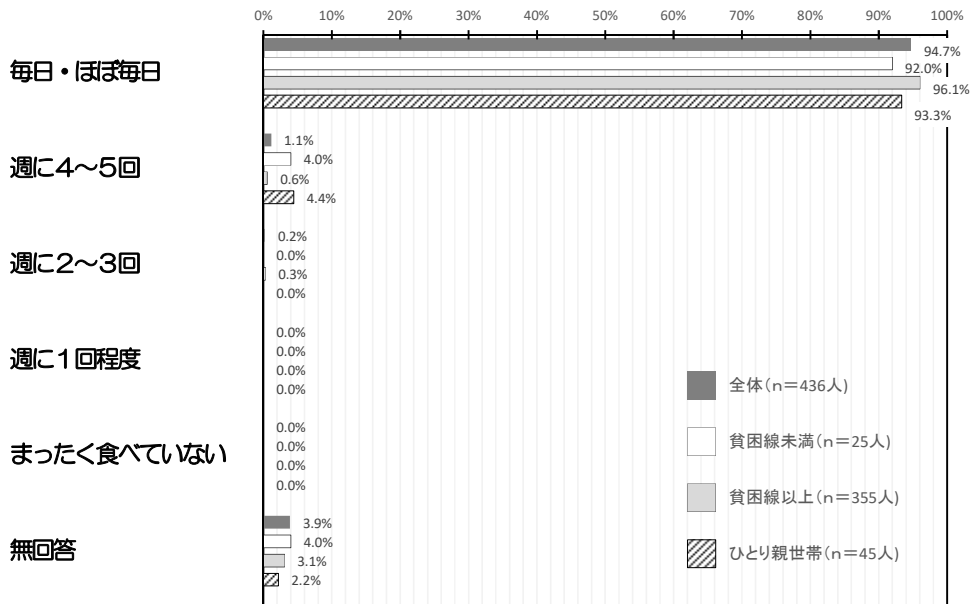
2) 夕食摂取状況

<保護者の回答>



子どもの夕食の摂取状況は、「毎日食べる」が95.8%と大半を占めている。貧困線の判定別、ひとり親世帯でも夕食の摂取状況に大きな差はみられない。

<子ども自身の回答>

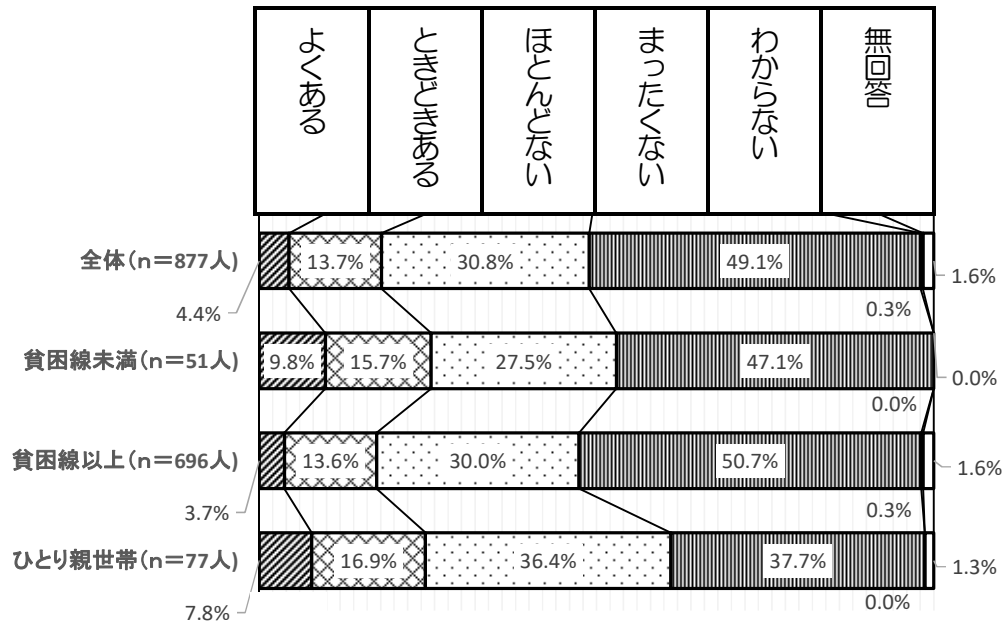


夕食の摂取状況は、ほぼすべての子どもが「毎日・ほぼ毎日」(94.7%)食べているとしている。

貧困線の判定別、ひとり親世帯でも、夕食の摂取状況に大きな差はみられない。

(10) 子どもの孤食の状況

<保護者の回答>

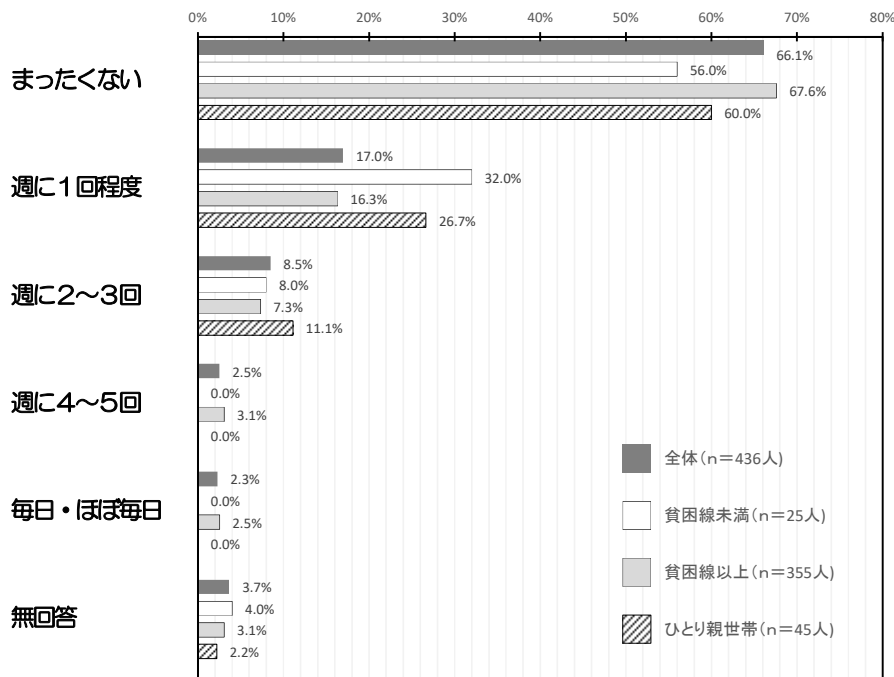


子ども一人で食事をする頻度は、「まったくない」が 49.1%、「ほとんどない」が 30.8%と、8割が子どもだけで食事することはないとしている。

“貧困線未満”では「よくある」が 9.8%、「ときどきある」が 15.7%と、子どもだけで食事することがあるという回答が2割以上を占めている。

“ひとり親世帯”でも、「よくある」が 7.8%、「ときどきある」が 16.9%と子どもだけで食事することがあるという回答が2割を超えている。

<子ども自身の回答>

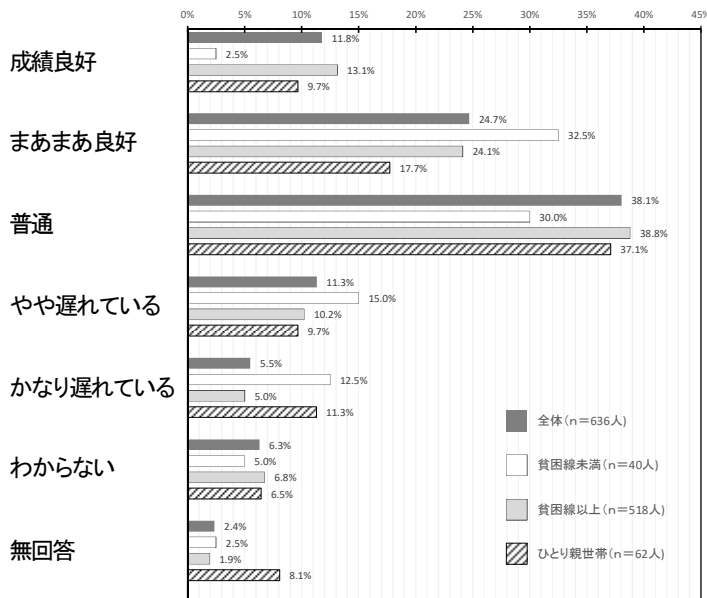


家で子ども一人で食事をする頻度は、「まったくない」が 66.1%と最も多く、次いで、「週に1回程度」が 17.0%、「週に2~3回」が 8.5%となっている。

“貧困線未満”“ひとり親世帯”では、「まったくない」が最も多いものの、「週に1回程度」の割合が高くなっている。

(11) 子どもの成績

※「小学校」、「中学校」、「高校」に通っている子どもについての回答



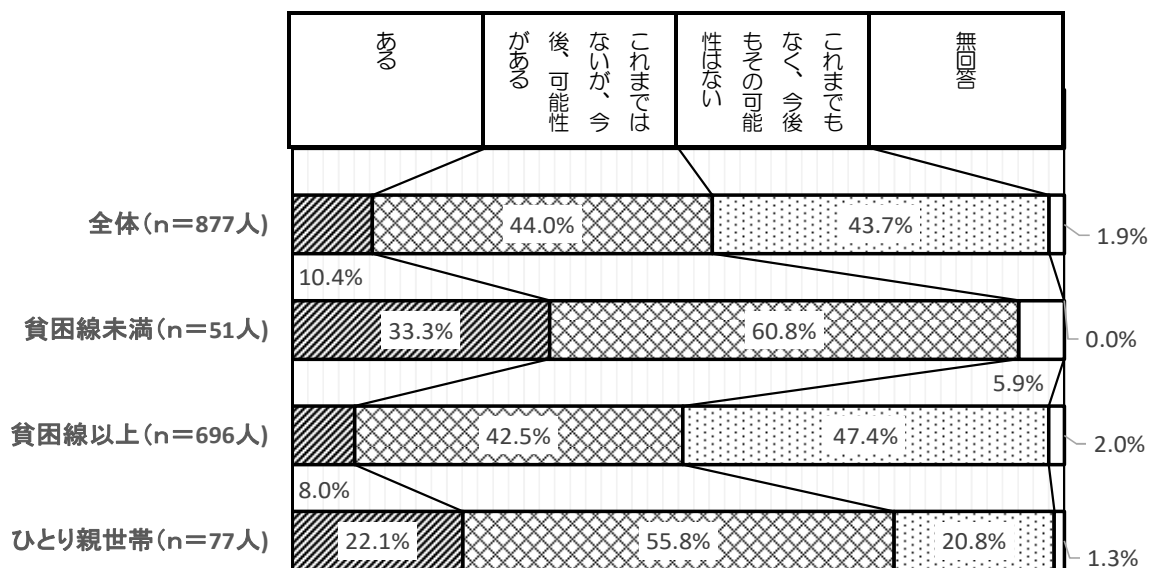
「小学校」、「中学校」、「高校」に通っている子どもの成績は、「普通」が38.1%と最も多くなっている。

「成績良好」(11.8%)、「まあまあ良好」(24.7%)を合わせた「良好」という回答は36.5%で、「やや遅れている」(11.3%)、「かなり遅れている」(5.5%)を合わせた「遅れている」の16.8%よりも割合は高くなっている。

貧困線の判定別にみると、「貧困線未満」では、「やや遅れている」(15.0%)「かなり遅れている」(12.5%)を合わせた「遅れている」という回答は27.5%で、「貧困線以上」の15.2%と比べ、「貧困線未満」の方がやや割合が高くなっている。

“ひとり親世帯”では、「かなり遅れている」が11.3%となっている。

(12) 経済的理由による進学・就学の断念



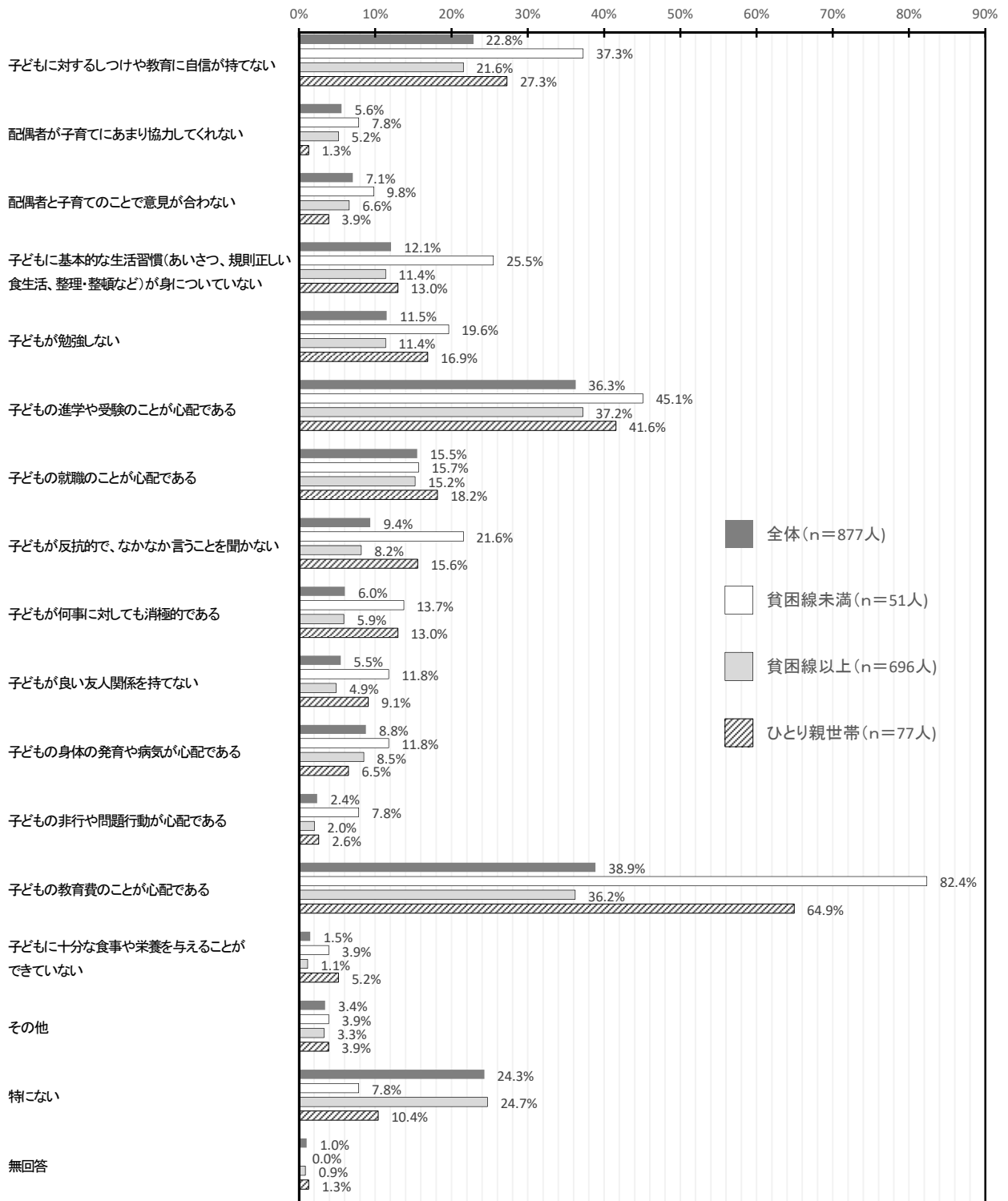
経済的な理由によって、子どもの進学や就学を断念（中退）したこと、または今後断念するかもしれない可能性について聞くと、「ある」が10.4%となっている。

「これまでもなく、今後その可能性はない」は43.7%と4割を超えているが、「これまではないが、今後、可能性はある」という回答も44.0%と4割を超えている。

貧困線の判定別にみると、「貧困線未満」では「ある」が33.3%、「これまではないが、今後、可能性はある」が60.8%と、ともに「貧困線以上」よりも割合が高くなっている。

“ひとり親世帯”でも「ある」(22.1%)と「これまではないが、今後、可能性はある」(55.8%)への割合が高くなっている。

(13) 子どものことで悩んでいること

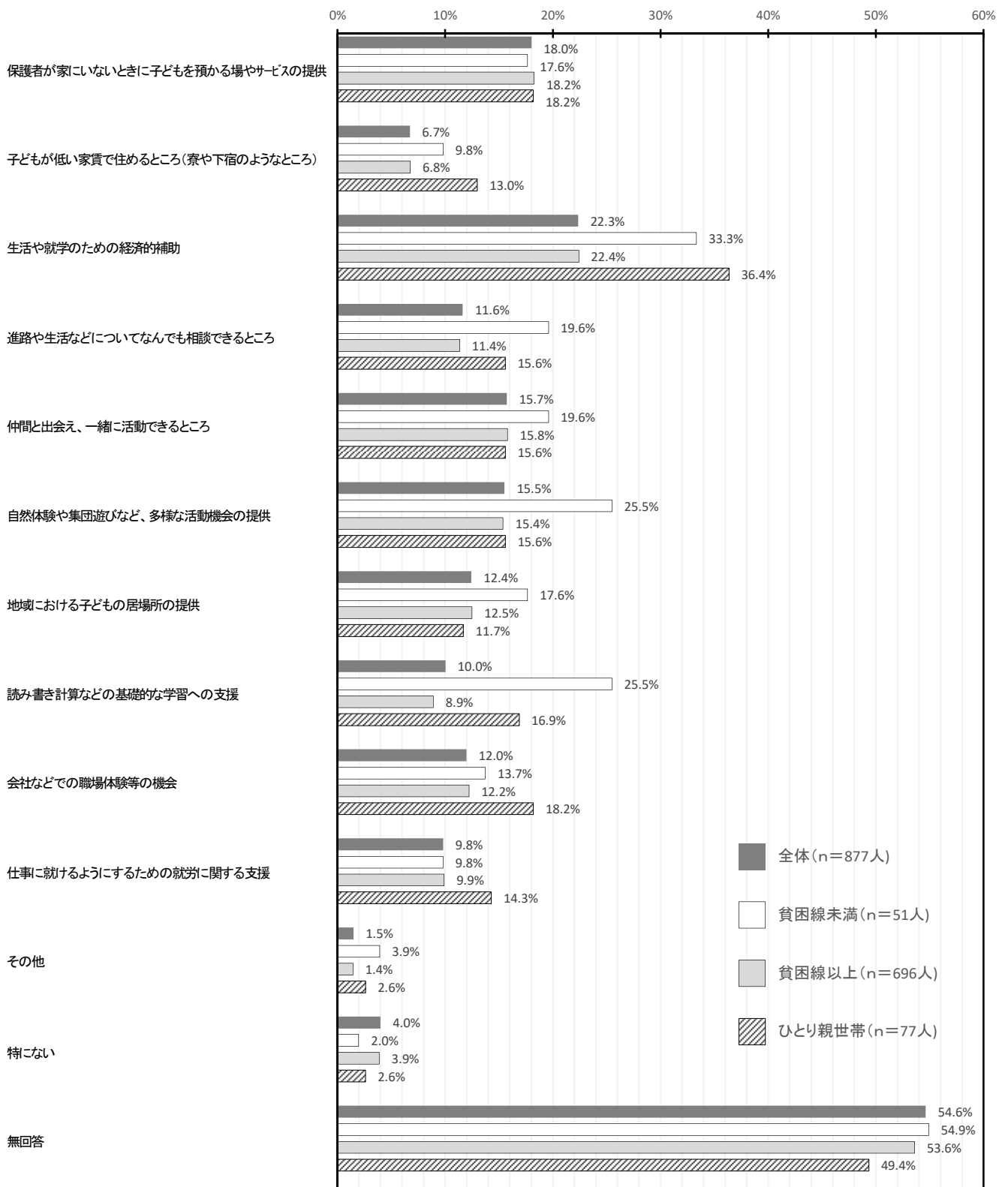


子どものことで悩んでいることについては、「子どもの教育費のことが心配である」(38.9%)、「子どもの進学や受験のことが心配である」(36.3%)への回答が3割を超えて多くなっている。次いで「子どもに対するしつけや教育に自信が持てない」が22.8%となっている。

貧困線の判定別にみると、“貧困線未満”では「子どもの教育費のことが心配である」が82.4%と、“貧困線以上”よりも高い割合となっている。

ひとり親世帯でも「子どもの教育費のことが心配である」が64.9%と高くなっている。

(14) 今後、子どものために必要な支援

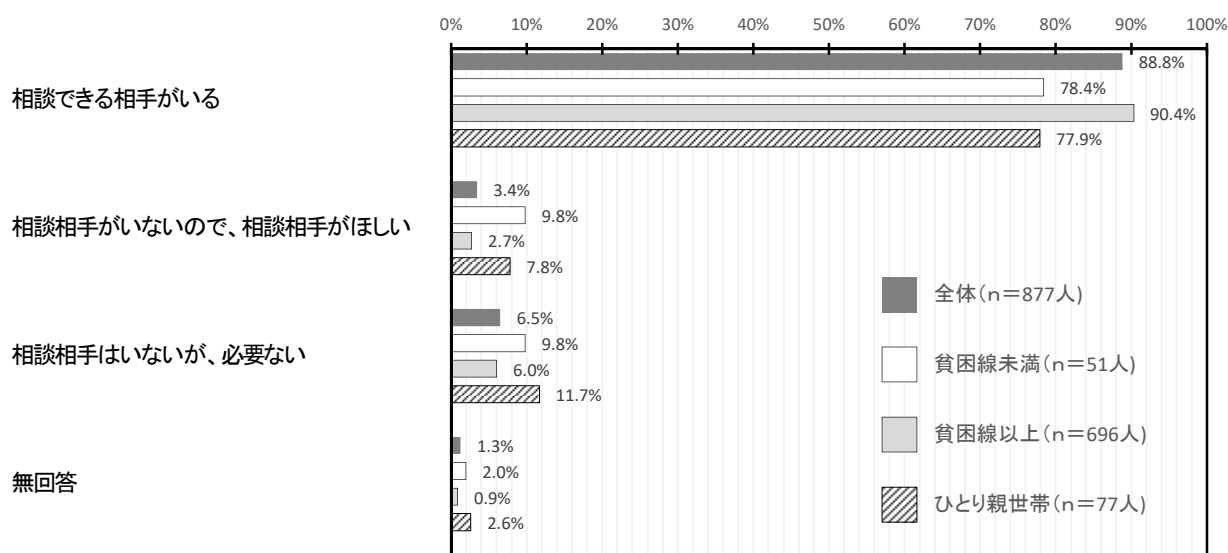


今後、子どものために必要な支援としては、「生活や就学のための経済的補助」が22.3%と最も多く、次いで「保護者が家にいないときに子どもを預かる場やサービスの提供」(18.0%)、「仲間と出会い、一緒に活動できる場所」(15.7%)、「自然体験や集団遊びなど、多様な活動機会の提供」(15.5%)などが多く挙げられている。

貧困線の判定別にみると“貧困線未満”の方が“貧困線以上”よりも多くの支援を必要としており、特に「生活や就学のための経済的補助」(33.3%)「自然体験や集団遊びなど、多様な活動機会の提供」(25.5%)「読み書き計算などの基礎的な学習への支援」(25.5%)で高くなっている。

“ひとり親世帯”では全体の回答よりも、「生活や就学のための経済的補助」(36.4%)、「会社などでの職場体験等の機会」(18.2%)、「仕事に就けるようにするための就労に関する支援」(14.3%)、「子どもが低い家賃で住める場所(寮や下宿のような場所)」(13.0%)の回答の割合が高くなっている。

(15) 保護者の相談相手の有無

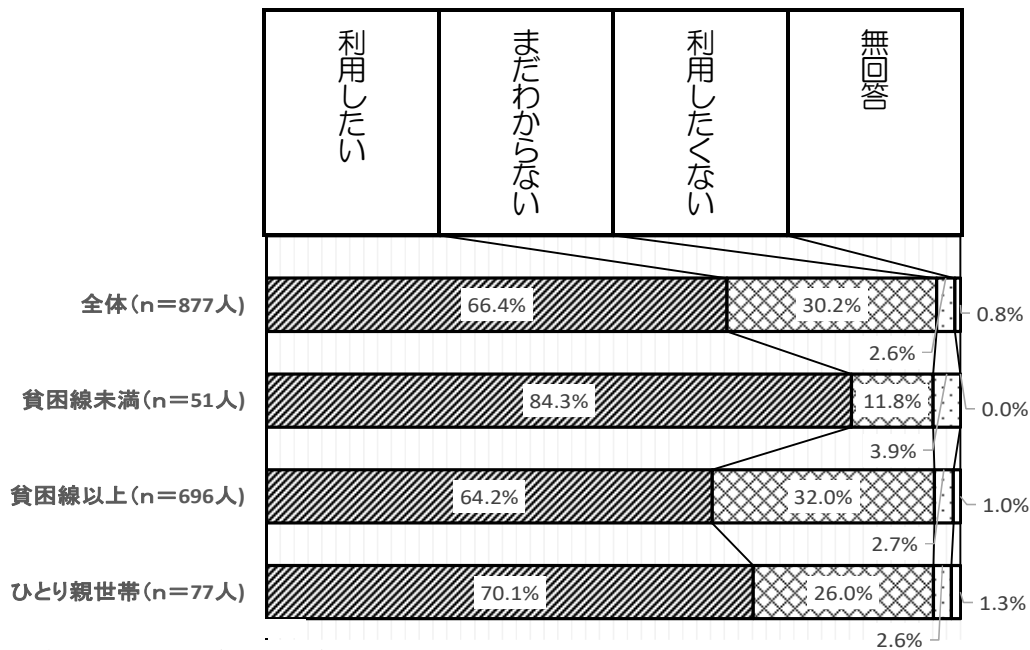


心おきなく相談できる相手については、「相談できる相手がいる」が88.8%となっている。また「相談相手がないので、相談相手がほしい」は3.4%となっている。

貧困線の判定別にみると、“貧困線未満”では「相談できる相手がいる」との回答は78.4%と高いものの、“貧困線以上”よりはやや割合が低くなっている。

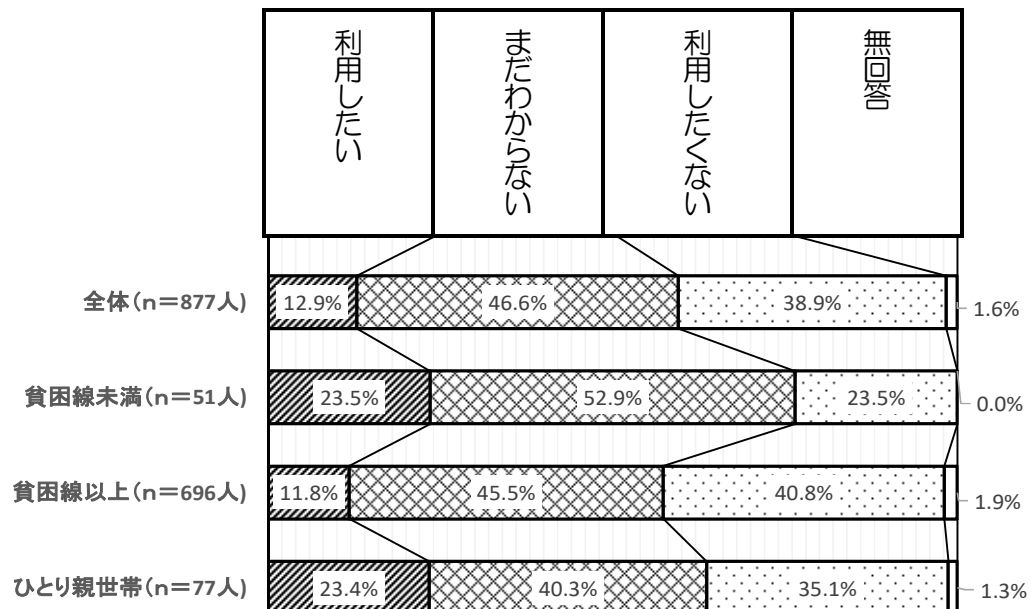
“ひとり親世帯”では「相談できる相手がいる」(77.9%)が7割を超えているが「相談相手はいないが、必要ない」が11.7%と全体の回答に比べ、やや割合が高くなっている。

(16) 無料の学習支援制度の利用意向



無料の学習支援制度の利用意向は、「利用したい」が66.4%となっている。
 貧困線の判定別にみると、「貧困線未満」では「利用したい」が84.3%で、「貧困線以上」よりも高い割合となっている。
 「ひとり親世帯」でも、「利用したい」は70.1%と高くなっている。

(17) 「子ども食堂」の利用意向



「子ども食堂」の利用意向は、「まだわからない」が46.6%と最も多くなっている。
 「利用したい」は12.9%にとどまり、一方「利用したくない」が38.9%となっている。
 貧困線の判定別にみると、「貧困線未満」では「利用したい」が23.5%と「貧困線以上」よりもやや高い割合となっている。
 「ひとり親世帯」でも「利用したい」が23.4%となっている。

利府町子どもの生活に関する実態調査結果報告書

〔概要版〕

平成30年3月

発行：利府町子ども支援課

〒981-0112

宮城県宮城郡利府町利府字新並松4番地

TEL：022-767-2193